JAPAN HONG KONG

飛 FLYING DRAGON 龍

日本香港協会ニュース No.89

動き出した香港スマートシティ構想

日本香港協会　理事　原　義弘

香港政府は、今後数年以内に最新のテクノロジー（I&T）を活用したワールドクラスのスマートシティを実現させる見込みである。5G（第5世代移動通信システム）などのネットワーク環境の進化、日々蓄積されるビッグデータ活用、AI（人工知能）やロボティクスシステムによる業務の効率化や生産性向上が全世界的規模で現実のものとなり、未来における人々の生活を変革させるスマート社会が訪れようとしている。「Hong Kong Smart City」は2018年4月13～16日に開催されたInternational ICT Expoのハイライトテーマでもあり、以下の6つのカテゴリーにおける効率的で持続可能な都市計画や管理システムによる明るくスマートな未来都市計画が描かれている。

Smart Mobility･･･最先端の公共交通網管理システムを多方面から整備する事により、人々の移動手段の利便性を高める。

Smart Living･･･フリーWifiサービスの充実、デジタルペイメントシステム、eID提供による日々の健康管理サービスを実現させる。

Smart Environment･･･低炭素化を目指して大気汚染、エネルギー、リサイクルなどの問題を解決し、より住みやすい環境作りを目指す。

Smart People…STEM（Science、Technology、Engineering、Mathematics）という教育トレーニングプログラムを充実させ、I&Tプロフェッショナルにおけるタレントを育成し、スタートアップベンチャーを生み出す。

Smart Government･･･政府として最先端I&T技術を活用したスマートシティインフラ整備に取り組む事により、公共サービスにおける情報提供を充実させる。

Smart Economy･･･シェアリングエコノミーの推進、フィンテックによる金融サービスの拡充による利便性向上、ツアリズムの利便性として空港設備、西九龍―深圳―広州をつなぐ鉄道、香港―珠海・マカオを結ぶ橋それぞれにおける高品位なサービスを提供する。

この香港スマートシティ実現により、今後訪問するたびに大きな変革に気付かされる事になるであろうと考える。

詳細は以下ウェブサイトに掲載。

www.smartcity.gov.hk

2018年9月 発行（禁無断転載）

目　次

動き出した香港スマートシティ構想……1
「一帯一路」構想と香港が果たす役割……2
Hong Kong Forum オプショナルツアーに参加しましょう……3
香港ノスタルジーにはまる香港映画『29＋1　29歳問題』……4
大館のオープンと歴史的建造物……5
香港フォーラムにご参加される皆さまへ～香港貿易発展局主催イベントのお知らせ～……6
連合会・各協会便り
東　京：第48回ビジネス懇話会「香港・台湾・中国と拡大した日本インバウンドの20年～小田急グループの経験から～」
第1回香港座談会……7
関　西：香港・一帯一路セミナー2018開催～「一帯一路」経済圏構想とは？日本企業の商機は？～
文化部セミナー開催……8
中　京：Great Collectors BOSTONの見学及び城郭建築……9
九　州：香港でのラグビーワールドカップ2019九州開催プロモーション……10
山　形：2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて…11
北海道：札幌市とジェトロ北海道、「香港ビジネスセミナー」開催
北海道日本香港協会 理事会を開催……12
宮　城：平成30年度通常総会＆記念セミナー、懇親会を開催
「女性部会講演会：魅知国定席 花座ができるまで」を開催…13
沖　縄：香港で泡盛イベント（琉球泡盛の夕べ）開催
AEON屯門店で沖縄フェア開催……14
広　島：香港からの観光客の動向について……15
新　潟：大地の芸術祭にて香港ハウスが開館……16
高　知：高知から香港へ～新体制によるこれからの高知日本香港協会の役割～……17

「一帯一路」構想と香港が果たす役割

香港貿易発展局　東京事務所長　伊東　正裕

「一帯一路」構想とは、2013年に中国の習近平国家主席が提唱した現代版シルクロード広域経済圏の発展計画である。それは、中国が世界経済の中心的地位を占めていた古代シルクロードの再現を意識したもので、ユーラシア大陸からアフリカ大陸に跨がる周辺国65カ国を対象としている。これら周辺国を全て合わせた経済規模は、世界人口の約63%、世界貿易高の約35%、世界GDPの約30%を占めるといわれている。

本構想は中国にとっての周辺国との外交の軸として、また新しい対外開放戦略の一環として位置づけられており、陸路の「シルクロード経済ベルト（『一帯』）」と海路の「21世紀海上シルクロード（『一路』）」から構成されている。「シルクロード経済ベルト」は、①中国から中央アジア、ロシアを経て、ヨーロッパまで、②中国から中央アジア、西アジアを経てペルシア湾、地中海まで、③中国から東南アジア、南アジア、インド洋まで、という3つのルートから、「21世紀海上シルクロード」は、①中国の沿海から南シナ海を経てインド洋やヨーロッパまで、②中国の沿海から南シナ海を経て南太平洋までという2つのルートからなる。「政策面の意思疎通」、道路をはじめとする「インフラの連結」、「貿易の円滑化」、「資金の融通」、「民心の意思疎通」の5つの分野に亘り協力を進めることが提唱されている。

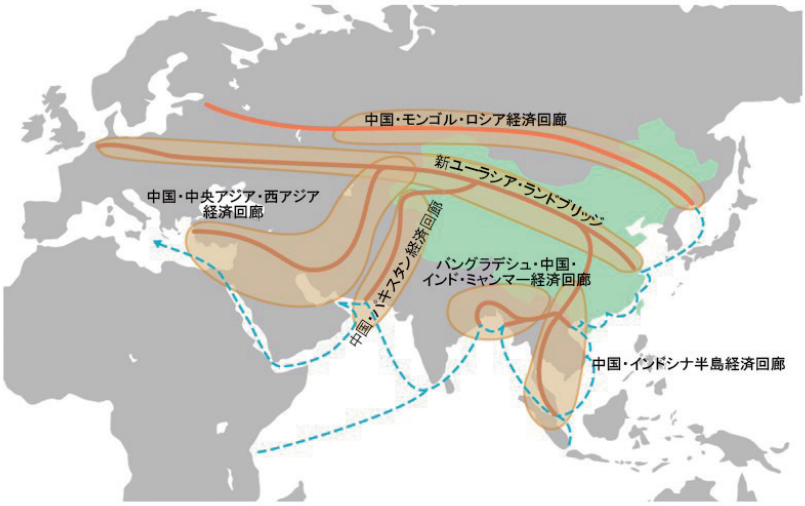
具体的な動きとしては、陸海空を一体化した立体的交通網の整備の一環として、新ユーラシアランドブリッジ計画（江蘇省の連雲港を起点として、西安、ウルムチ、中央アジア、ロシアを経由して、ロッテルダムまで鉄道を建設する計画）、中国・シンガポール経済回廊、中国・インド・ミャンマー経済回廊など、陸の基幹ルートが形成されつつあり、各沿線国には自由貿易区と物流センターが急ピッチで設置されている。また、これらインフラ整備を資金面から支援するため、シルクロード基金や、アジアインフラ投資銀行（AIIB）、新開発銀行、上海協力機構開発銀行などの設立計画が、中国の主導で進められている。中国内においては、本構想の重点地域として、西北（新疆、陝西、甘粛、寧夏、青海、内モンゴル）、東北（黒龍江、吉林、遼寧）、西南（広西、雲南、チベット）、沿海（上海、福建、広東、浙江、海南）、内陸（重慶）が指定され、投資計画の推進に積極的に取り組んでいる。

一方で、本構想は実現に向けていくつかの課題が指摘されている。第一に、域内外の大国の支持を得ることの難しさ（資源面における米国・日本・EUとの利益衝突、ロシア・インドは中国の中央・南アジアへの進出を警戒）、第二に、対象国の多様性・異質性（発展段階・宗教・文化の差異や高関税政策）、第三に、中国と一部対象国との間の領土・領海問題（南シナ海と国境地域における緊張状態）、第四に、投資に伴うカントリー・リスク問題（紛争地域、政治・経済・社会面で不安定な国の存在、道路・港湾などのハード面に加え法律や税制などのソフト面のインフラが未整備）である。

ここで、本構想において香港が果たす役割について述べておきたい。中国をはじめ周辺国が香港に期待しているのは、第一に、「緩衝地帯（Buffer Zone）」としての役割（政治的・文化的異質性の緩和・克服）、第二に、「翻訳者（Interpreter）」としての役割（中国政府による壮大な国家計画を実現可能な事業へ整理・分解）、第三に、「結合者（Super Connecter）」としての役割（中国と世界を連結する津梁機能）、　そして第四に、「統合者（Integrator）」としての役割（事業と資金、国を跨ぐ企業と企業をコーディネート）であろう。ヒト・モノ・カネが世界中から集積する香港、特に自由貿易港としてのハブ機能や国際金融センターとしての資金調達機能を発揮することを期待されているのは言うまでもない。

21世紀海上シルクロードの要衝として位置づけられている香港は、広東省珠江デルタの9都市（広州・深圳・東莞・恵州・仏山・江門・中山・珠海・肇慶）およびマカオとの一体化を推進する地域発展計画「大湾区」構想でも中心的機能を担っている。そして、本「大湾区」構想は、香港＝深圳間の擬似国境の延伸、つまり湾区内を「グレーター香港」として活性化し、ひいては「一帯一路」沿線国全体の発展にも繋げることを意図していると見られている。日本の企業もこれらのプロジェクトに参画するに当たっては、今一度香港の役割や重要性について再認識する必要があるのではなかろうか。

一帯一路構想における「六大経済回廊」



「大湾区」と「21世紀海上シルクロード」の連結性と広がり

Hong Kong Forum オプショナルツアーに参加しましょう

日本香港協会　副理事長　藤澤　慶彦

今年のHong Kong Forumは12月4日から2日間開催されることはご存じの通りです。

その後にオプショナルツアーがあり、今年は6日から8日まで「珠海、中山市サイドトリップ」が予定されています。詳しくはHong Kong Forum案内の最後に掲載されていますが、香港に隣接した珠江デルタ地帯で経済発展が著しい地帯です。

「食は広州にあり」で美味しい食事も楽しめると思います。加えて中山市は1911年に三民主義を掲げて辛亥革命を成し遂げた革命の父孫文生誕の地で、生家は今でも観光の名所です。費用はホテル2泊・食事・交通費の合計がHK＄5,300（約80,000円）とリーズナブルです。

ご参考までに昨年のオプショナルツアー重慶訪問の様子を紹介します。昨年も2泊3日の旅でした。参加者は32名で、ほぼ半分がオーストラリア、シンガポール、マレーシア、アメリカ、カナダの在外華僑です。残り半分はスイス、イギリス、オーストリア人でした。香港貿易発展局（HKTDC）からはMs. Iris Wong, Director, Belt and Road & External Relationsを団長とする4人。さらに、HKTDCの重慶駐在所長他4人が参加して総勢40人のミッションでした。

第1日	午前	香港―重慶
	午後	力帆集団（Lifan Group：EVを含む自動車メーカー）見学 重慶市政府訪問
	夕食	重慶市政府歓迎夕食会
第2日	午前	重慶香港工業団地（キヤノンの工場を含む）見学
	昼食	HKTDC主催昼食会（重慶ベースの香港企業の経営者と）
	午後	西部物流圏（一帯一路の内陸部拠点）見学
	夕食	希望者のみ参加
第3日	午前	大足石刻（Dazu Rock Carvings：莫高窟〔ばっこうくつ〕のような大遺跡）観光
	昼食	カジュアルランチ
	午後	重慶空港へ、夜半香港着、解散

一帯一路の内陸拠点としての重慶の発展ぶりを見ることが出来たと同時に、重慶共産党支部の沿岸都市への対抗心など興味深い会談もありました。現在重慶市内には1万台のEVを試験的に走らせていること、それも市民がスマホで予約してシェアできるようになっています。空気と水の汚染対策は待ったなしの状況のようです。かかる新しい政策が果敢に試みられるのが、デジタル化において日本より進んでいる一因かもしれません。わが国は失敗すると行政府の責任が問われるため、事前の議論に時間を取られて結局石橋を叩いても渡らない結果になりがちです。

また、重慶市内は高速道路網の整備が経済発展に追いつかず交通渋滞の解消にはまだ時間がかかりそうであったり、車窓から見ると新築のビルが林立する一方で、一部古いビルに空き家が目立つなど、わが国の空き家問題とは少し事情が違ってはいるものの、どの国にもある課題を垣間見る機会もありました。全体としては13億人の国民に快適な生活をさせるために、中間層の底上げを目指して年率6%台というとてつもない高度成長を掲げる世界第2の経済大国の勢いを感じました。最終日の大足石刻遺跡はあまり期待していなかっただけにかえって驚きました。あたかも莫高窟を思わせる仏像の数々が、それも色鮮やかに残っていました。重慶から車で1時間強の山中にあるとは言え、1966年の文化大革命でよくぞ破壊されなかったものだと妙に安堵しました。

中国の歴史遺産に接すると何やらほっとするのは私だけではないようでした。HKTDCと重慶の皆さんが行く先々で親切にアテンドしてくれました。因みに通訳は英語と中国語だけですが、同行者とは直ぐにうちとけて、あっという間の楽しく有意義な旅でした。

今年の珠海・中山プログラムを大いに期待しています。ご参加を希望される場合は日本香港協会にご連絡下さい。

サイドトリップ2017

大足石刻

香港ノスタルジーにはまる香港映画『29＋1　29歳問題』

日本香港協会　広報委員　ジャッキー鶴丸

今年の第37回香港電影金像奨で7部門にノミネートされ、最優秀新人監督賞を受賞した香港映画『29歳問題』を観た。2005年に初演され、以降ロングランヒットとなった舞台劇『29＋1』を映画化したものだ。その舞台の作・演出・主演を務めたキーレン・パンが、自ら監督・脚本を手がけている。香港で最も有名な舞台女優だというキーレン・パンの名前を恥ずかしながら筆者は全く知らなかった。

『29歳問題』はラブコメディ映画と聞いていたので、軽い気持ちで観たが、のっけから「？？？」が頭の上で点滅。映画の主人公が、筆者の描く香港人女性と全く異なるイメージに描かれていたからだ。映画の主人公は、1975年4月3日生まれの29歳。キャリアの道を進みたいが、婚期も逃したくない、と思い悩む。職場で昇進したはいいが、恋人とはすれ違い、気持ちが離れていく。実家の親が認知症になって、気がかり。これが日本のOLの話だったら理解できる。筆者が認識している香港人女性は、仕事か結婚かなどで悩んだりはしない。どっちも選ぶ。結婚したって働くだろうし、子どもができれば、親あるいは姑に預ける、ある程度稼ぎがある人なら家政婦を雇って仕事と家庭を両立させる。

そして、映画では、親が倒れて入院したのに、仕事ですぐに飛んで行けず苦しむシーンが出てくる。これもおかしい。というのも、香港人は家族をとても大事にするからだ。ある日系企業の経営者から聞いた逸話がある。いよいよ新店舗がオープンするという日、リーダー格の社員がお店に来ない。事故でも起きたかと心配して電話をしたら、「今日はお母さんの誕生日で、家族でご飯を食べるのでお店には行きません」。その経営者は意気消沈したという。仕事より家族。仕事中に家族に私用電話をかけるぐらい朝飯前の彼等だ。また、主人公の恋人にしても、しかり。映画では、仕事のストレスでイライラが募った主人公と恋人が激しく口喧嘩をする。香港女性は気が強い。しかし、たとえどんなに罵られても、黙って聞くのが香港人男性。言い返したりはしない。香港人男性は優しいと思っていたのだが、これも筆者の思い違いか。というより、世代が違うのかもしれない。

香港は目まぐるしく変化する。1998年に啓徳空港がクローズし、ランタオ島沖に新しい空港ができてからは、跡地も含めて香港の再開発がもの凄いスピードで進んでいる。不動産が高騰、物価が高騰。人の暮らしも、そして生き方も変わったのだろうか。

そんな筆者の考えをよそに、映画のほうはテンポよくストーリーが進む。深夜残業をした主人公を乗せるタクシー運転手役に軟硬天師の葛民輝（エリック・コット）、主人公の住むアパートの大家役が同じく軟硬天師の林海峰（ジャン・ラム）。すっかりおじさんになった彼らを見て、月日の速さに深いためいきが出た。ロケ地のアバディーンの公営団地の冰室（カフェ）や大埔、沙田、旺角などは、ディープな香港ファンにはお馴染みの場所。香港式ミルクティや豆腐花も、定番中の定番だが、再開発の波に消えそうな古い街並みやカフェがスクリーンに映し出されると、香港にハマり始めた1986年ごろの自分を思い出し、思わず涙腺がゆるみそうになった。そして、レスリー・チャンやBEYONDファンは号泣してしまうかもしれない音楽やシーンが出てくるのだ。

映画は2005年の香港が舞台。若い世代の主人公が生きる香港の中に、ノスタルジックな香港がまざり、まさに「鴛鴦茶」みたいな映画だった。香港にハマった人にはもちろん、まだ香港に行ったことがない人にも、この映画をおすすめする。そして、また香港にハマる人が増える。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『29歳問題』　全国順次公開中

(c) 2017 China 3D Digital Entertainment Limited

配給：ザジフィルムズ／ポリゴンマジック

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

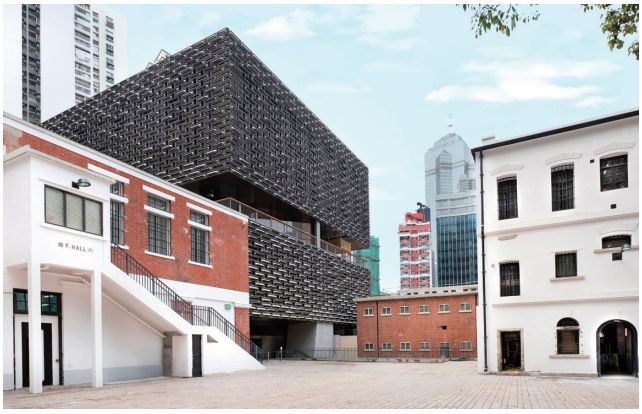
大館のオープンと歴史的建造物

日本香港協会　広報副委員長　小柳　淳

今年5月29日に前中區警署建築群「大館（Tai Kwun）」がオープンしました。セントラル（中環）地区の少し坂を上ったハリウッド道（荷李活道）から坂上に広がる、既に使用停止になっていた旧中区警察署（中文では中區警署）や中央裁判所、ビクトリア監獄（刑務所）など16棟の建築物を再利用する形で、複合文化施設としてのオープンです。建築群と呼ばれるだけあって、大小の建築物が一区画にまとまっています。警察署も刑務所も機能停止をしてかなり経っていましたが、やっと新しい形で入場できるようになりました。19世紀の歴史的建築物を見学できるほか、美術館、舞台芸術などの場ともなっています。入場は予約制で、入場者数に制限がありますので、訪問時には予めインターネットから予約が必要です。入場は無料です。

大館の中でも大きなスペースを占めるビクトリア監獄の開設は1841年。香港が事実上英領植民地になったのは1841年1月。植民地政庁が機能するのとほぼ同時期に早くも刑務所ができた訳です。警察組織も当初32名で同年に成立しました。当時の香港警察は幹部がイギリス人、警官はインド人が多数を占めていました。現存する中区警察署は1864年の完成です。植民地成立後すぐに刑務所と警察ができたというのは植民地の本質を表しているようにも思えます。これで警察と刑務所がセットで機能し始めるのですが、治安機構が守っていたのは香港の治安とはいえ、英国はじめ欧米植民者の安全と財産だったのかと思います。刑事事件で捕えられて裁判に回されても、法廷用語は英語オンリー。この事態が改善されて英中2語が公用語になるのは100年以上後の1972年です。

元々公共施設用地とはいえ、香港セントラルの一等地です。1万3,600平方メートルの広大な土地が商業地に転用されず文化施設として再利用されたのは、隙間なく高層ビルで埋め尽くされてゆく香港市街地にホッとする空間を残す素晴らしいことだともいえます。自然の地面が目に入らぬようなコンクリートジャングルの香港ですが、意外にも多くの歴史的建造物が保存・再利用されています。それも単なる保存ではなく、文化施設から商業施設、ホテルなどへの利用を積極的に行っているところが香港らしさかと思います。傾向としては政府施設であったものは文化施設、民間のものは商業・宿泊施設への利用というパターンが多いのですが、そこは香港、かなり多様性があります。



超現代建築と19世紀建築の合体（写真提供：Tai Kwun）

1881 Heritageは元の水上警察本部

公共建築物の活用例としては、アドミラルティ（金鐘）の丘の上に見える白い瀟洒な洋館、茶具文物館は元の英軍司令官官邸。少し西寄りに近年開設されたPMQは元々警察官官舎です。そして、香港島の南岸スタンレー（赤柱）の海辺に建つ石造の大きな建物、マレーハウスはアドミラルティにあった兵舎です。それを分解移築したもので、こちらはレストランなどが入る商業施設として利用されています。少し変わったところでは、尖沙咀南端のショッピングモールの1881Heritage。そこには海上警察本部や時間球塔など航海関連の施設が集積していました。ジャッキー・チェン映画『プロジェクトA』にも登場した水上警察本部ビルはホテルHullett House、現在の高級ブランド店の辺りは本部ビルのあった丘を掘り下げて造ったところです。

中心市街地から離れても、あちらこちらに19～20世紀植民地建築物の再利用が見られます。香港最大の島、ランタオ島の西北端にある水の都、大澳。その更に西の外れには大澳警察署をリニューアルした大澳ヘリテージホテルが海を見おろす丘上に2012年に開業しました。僅か9室のホテルですが、亜熱帯地方に造られた洋館の特徴である、深い軒を持つ回廊があり、空調のなかった時代に強い陽射しや雨を遮る工夫が見られます。

香港で多くの歴史的建造物が保存・再利用されている反面、残念ながら取り壊して再開発されてしまったところも多数あるのが事実です。かつて九龍十郷とされた郷村のひとつであった衙前圍は、香港が植民地化する以前からあった圍村と呼ばれる周囲を囲った村でした。レンガの壁と僅かな門で一族を守った様式です。旧啓徳空港近くにあり、最後の圍村ともいわれましたが、2013年にはごく一部を除いて再開発が始まりました。狭くて人口の多い香港で、歴史的建造物を保存・活用するというのはかなり難しいことでもあるのですね。

香港貿易発展局　コーポレート・コミュニケーション&マーケティング・マネージャー　米岡　哲志

香港フォーラムにご参加される皆さまへ　～香港貿易発展局主催イベントのお知らせ～

「香港フォーラム」が、12月4日、5日に香港で開催されます。この時期は香港貿易発展局主催の展示会と国際会議が香港会議展覧センターで多数開催されます。会場にお立ち寄りの際にはぜひ、お時間の許す限り多くのイベントにご参加ください。

◆デザイン・インスパイア

公式サイト：http://www.hktdc.com/ncs/designinspire2018/en/main/index.html

12月6日～8日に開催。創造力豊かな製品の数々が出品され、会場の中をただ見て歩くだけでも楽しめます。世界屈指のデザイナーやイノベーター、流行を発信するブランド、組織、団体が一堂に集結。多数のデザイン作品、インスタレーション（さまざまな素材を組み合わせた仮設作品）、関連プロジェクトなどが紹介され、デザイン世界の最前線に触れることができます。デザインのプロばかりでなく、一般来場者にも公開されています。

デザイン・インスパイア2017に出展された宍粟住建の茶室

日本からは日本建築材料協会（本部・大阪市）のほか、新潟、京都、大阪、兵庫などから出展者が参加します。

鮮やかなインスタレーションで目を引く展示ブース

◆香港国際フランチャイジング・ショー

公式サイト：http://m.hktdc.com/fair/hkifs-en

12月5日～7日に開催。今年で開催4回目を数えます。昨年は香港、中国本土、韓国、台湾、シンガポール、豪州、米国などから131社・団体が出展し、世界各地から訪れた来場者5,352人と活発な商談を行いました。香港を拠点にアジア全域に国際的なブランドを展開させようと目論むスタートアップ企業や中小企業が、自社製品・サービスの販売店、代理店、業務提携先などのビジネスパートナーを見つける場として活用されています。

香港国際フランチャイジング・ショー2017に出展した韓国最大の外食チェーン企業「nolboo（ノルブ）」

今後はぜひ、アジア市場開拓を目指す日本企業のフランチャイズ本部にも、加盟店募集などの足掛かりとして本ショーでビジネスチャンスをつかんでいただきたいと思います。

◆スマートビズ・エキスポ

公式サイト：http://m.hktdc.com/fair/smartbizexpo-en

12月5日～7日に開催。上述のショーといわば双子のイベントで、スタートアップ企業や中小企業へのビジネスソリューションを提供する場として昨年、初めて開催されました。昨年は香港から210社、中国本土から127社、その他海外から186社の計523社が出展。アフリカ、中東、南米といった遠隔地からも来場者が訪れ、目まぐるしく変化するビジネス環境の中で勝ち抜くためのソリューションを求めて出展者と商談を行いました。

◆その他同時開催イベント〔公式サイト〕

『アジア電子商取引サミット』　http://www.hktdc.com/ncs/aes2018/en/main/index.html

『アジア知的財産ビジネス・フォーラム』　http://www.hktdc.com/ncs/bip2018/en/main/index.html

香港と日本の経済・ビジネス分野での提携を再定義する一大イベント、ふたたび

特別予告

日本では 過去最大規模 となる シンポジウム

2018年 11月1日(木) 開催

詳しい情報とお申し込みは公式サイトにて

www.thinkglobalthinkhk.com/jp（公式サイト）

参加費無料

think GLOBAL think HONG KONG

国際化へのパートナー：香港

日本香港協会　副理事長　ビジネス交流委員長　佐藤　征洋

第48回ビジネス懇話会「香港・台湾・中国と拡大した日本インバウンドの20年～小田急グループの経験から～」

平成30年5月29日、銀座の外国特派員協会において株式会社ホテル小田急代表取締役社長の小柳淳氏を講師にお迎えし、日本香港協会と香港貿易発展局の共催で第48回ビジネス懇話会が開催された。演題が時宜を得て多方面の関心が高く、参加者は定員の40名に達した。

講師の小柳氏から国内、海外の豊富な経験を踏まえて、様々な切り口からの数字、グラフ、写真を駆使した立派な資料を提示いただき、現状分析、今後の見通し等を平易にお話いただいた。日本インバウンドは日本政府の施策と民間の努力の結果、長い助走を経てここ数年特に急増したことであり、特に2015年に日本人海外旅行者と訪日旅行者数が逆転したこと、2017年では2,869万人の訪日旅行者となり、その消費額が4兆4千億円、うち東京で1兆6千億円となっている等の変化と大きな経済効果を示された。更に具体例として小田急グループでの鉄道、ホテルその他施設でインバウンドを取り込むための様々な苦労、成功体験を丁寧に分かりやすくご披露いただいた。今や、正に日本の経済、社会にも大きな影響をもたらしていること、今後とも外国との関わりが不可欠でインバウンドが重要であることを受講者一同で実感したものである。

講師が20年ほど前にインバウンドの可能性に気付いたきっかけは、香港の発展を目の当たりにしたこと、そして現在の訪日旅行者数は中国からが最大であるとのご指摘は当日本香港協会として意義深く感じるものであった。今後のインバウンドを受け入れる問題点、課題を具体的に提示され、インフラの整備、日本社会の順応性に言及された上、2020年に4,000万人、更に将来は6,000万人も可能性があるとのお話もあった。講演の中では、世界各地の特徴が例示され、文化の相違でも非常に興味深いものであり、単にインバウンドの増大という事象に留まらず、幅広く社会現象を理解する上で大変意義深いものであった。

日本香港協会　理事　野島　威

第1回香港座談会

5月18日の18時より、初めての香港座談会を麹町のスパイスHUBにて開催しました。これまでのセミナー等と異なり、双方向のコミュニケーションを目的として楽しく香港の時々の話題等を中心にして、日本香港協会の会員のみならず異業種の知り合いの方も多数ご参加頂きました。香港貿易発展局東京事務所の伊東所長も参加され、11月のキャリー・ラム行政長官来日のシンポジウムの案内の詳細について説明がなされ皆様も関心を持たれました。加えて次回当協会のビジネス懇話会のお誘いが佐藤副理事長よりあり、その他高知の「南国土佐まつり in 東京」のご案内など、少しスパイシーなネパール料理を食べながらワイン、ビール、焼酎何でも飲み放題の中で色々な話題で大変楽しく盛り上がりました。

4、5か月に一度はこの会を催したいと思います。次回も会員のみならずお友達や異業種の方などの参加も大歓迎なので是非お誘い頂き、スパイスHUBを貸し切って開催したいと思いますのでふるってご参加下さい。

関西日本香港協会事務局

香港・一帯一路セミナー2018開催～「一帯一路」経済圏構想とは？日本企業の商機は？～

去る5月10日に香港貿易発展局との共催で一帯一路セミナーを開催したところ、130名の参加者を得て盛会でした。当初の予想を大幅に上回る参加申込があり、大阪においても一帯一路に対する関心が高まってきたのを実感するセミナーになりました。

講演1：一帯一路（シルクロード経済圏）の全貌と香港の役割

講師：拓殖大学政経学部教授　朱炎氏

朱炎氏は、中国の習近平主席が2013年に提案したシルクロード経済帯（一帯）と21世紀海上シルクロード（一路）の地域経済協力の枠組み、沿線国における共同建設の政策理念と計画、中国の狙いとメリット、インフラ投資を支える金融、現在進行中の案件など詳しく解説されました。香港政府は一帯一路に対し香港の強みを発揮して①金融、②インフラ施設運営、③貿易、④専門サービス（法律・会計・建築など）、⑤観光、⑥紛争解決、などの分野でビジネスの開拓に意欲的に取り組んでいるようです。日本にとっても沿線国のインフラ整備と産業興しにビジネスチャンスがあるとの意見を述べられました。

講演2：香港と一帯一路　日本企業の商機とは

講師：香港貿易発展局大阪事務所次長　田中洋三氏

田中氏は、2015年5月に自民党の二階幹事長一行が北京で開催された一帯一路国際フォーラムに参加し、本年5月中国の李克強首相来日時の日中首脳会談で安倍首相が一帯一路官民フォーラムを設立する意向を表明した経緯を説明し、日本政府と民間企業がようやく動き始めたとの意見を述べました。また、大きく発展している香港、マカオと珠江デルタ広域経済圏構想についても説明しました。急速に発展するこの地域と動き出した一帯一路に関心が高まったセミナーでした。

満席の一帯一路セミナー

文化部セミナー開催

4月26日に女子バレーボールの日本代表として素晴らしい活躍をされた佐野優子氏に講師をお願いして、香港貿易発展局のセミナー室で文化部セミナーを開催し会場満席の25名が参加しました。

佐野さんは、女子バレーボールの日本代表として2008年北京、2012年ロンドンと二度のオリンピックに出場され、ロンドン五輪では守備の要「リベロ」のポジションで大活躍、28年ぶりの銅メダル獲得に大きく貢献されました。海外でプレーする日本人スポーツ選手が未だほとんどいなかった時代の2004年にフランスリーグのRCカンヌに入団し、海外4カ国でプレーして実力を養われ、ワールドカップや欧州、アジアのチャンピオンシップで数々のベストレシーバー賞を受賞しておられ、現役引退後も後輩の指導やテレビ解説などで活躍中です。

文化部セミナーで講演をする佐野優子氏

思い切って海外でのプレーにチャレンジされた勇気ある決断と行動力に感心させられ、チームメートへの思いやりの精神なども含めて学ぶことの多いお話でした。3位決定戦の感動的な場面が見られるロンドンオリンピックの映像もスクリーンに映していただき、参加者とも親しく交流していただき、楽しく有意義なセミナーでした。

法人会員交流会開催

当協会では法人会員、協会役員、香港貿易発展局職員との交流を促進し、香港や中国、アジアとのビジネスへの理解を深める目的で法人会員交流会を年2回開催しています。去る6月21日に当協会法人会員の大阪キャッスルホテル内にある、中国料理「錦城閣」で第1回交流会を開催しました。レストランの個室の窓から望む大川の夜景を眺め、満席になった24名の参加者が美味しい中華料理をいただきながら大いに歓談し会食を楽しみました。

会食に先立って、当協会理事の寺田雄一氏（元日清食品株式会社常務取締役）が台湾問題について話されました。寺田氏は、昨年秋に台湾の高雄と台北に旅行され、帰国後に「日本と台湾の人的交流の歴史と現在の政治状況」と題したレポートをまとめられ講演もしておられます。日清戦争に勝利した日本が台湾を統治した時代（1895～1945）に「植民地」としてではなく、「内地延長主義」で歴代の台湾総督や地方長官が治安回復、維持に努めたことや、インフラ整備や基幹産業の育成により台湾経済を支えた日本人の当時の活躍の様子を詳しく解説されました。親日的な台湾人が多いことが良く理解できたお話で、中国が台湾統合「一つの中国」を目指して台湾に圧力を加えている難しい政治情勢下にある台湾と民間レベルで今後共親しく付き合っていきたいとの思いを強くしました。

中京日本香港協会　事務局長　佐藤　亮一

GREAT COLLECTORS：BOSTONの見学及び城郭建築

◆ GREAT COLLECTORS：BOSTON

世界的な歴史・文化の遺産として、中京地区市民、他県の愛好家に親しまれた「名古屋ボストン美術館」は平成31年3月31日をもって、米国ボストン美術館との契約が終了する。今年2月18日～7月1日に、「GREAT COLLECTORS：BOSTON」が開催された。

愛知県は元より三重、岐阜等近県からの愛好家含め最後の臨場感ある美術展に触れるため、多くの来館者で賑わった。完全に20年の契約期間が切れるのは平成31年3月31日だが、閉館となるのは最終展の終了する10月8日で、閉館を惜しむ再来客が多く見られる（馬場館長談）。愛知には市美術館、博物館など展示文化が多くあるが、今回、特に「米国ボストン美術館」に歴訪の思い入れがあり、日本香港協会の会員各位にも紹介しておきたい。

実は、筆者私事だが1998年の契約に至る以前に、名古屋商工会議所共催（当時の名古屋商工会議所会頭加藤隆一氏）ミッションの参加者の一人としてボストンを訪問。先方館長、学芸員などスタッフから所蔵作品50万点以上といわれる、世界のコレクター所蔵も含む保管されている作品を見学した。作品の多さもさることながら、浮世絵コレクション等は桐の箱に入れるなど、絵画の保管方法が完璧。戦国時代の遺産、甲冑の多さは、わが日本国内の「城」見学ツアーで見られる以上の豊富さに驚かされたものである。同美術館と歴史的にゆかりの深い岡倉覚三（号は天心）やコレクターによる日本の作品を、アメリカの美術館で日本人が観るという複雑な心境も併せて経験した20年前が甦った。

海外における美術品はコレクターによる世界の美術品収集（贈入、寄贈、寄附）で成り立っており、今回、古代エジプト、中国美術、日本美術、フランス絵画、アメリカ絵画、版画、現代美術に至るまで最後に相応しい7分野の紹介に触れた。中京日本香港協会の会員約40名は、学芸員から作品の説明に満足した様子で、こうした会員サービスを企画することで、会員に対する夏場の一服の清涼剤となったことだろう。

名古屋ボストン美術館見学会参加者

◆城郭建築

話題は変わるが、ある調査機関で、「中部圏はビジネス面で全国的に優位性があるも観光産業としては今一歩の感あり」と聞くが、一方、別の調査機関では、「本年『昇龍道』のPRの効果あってか東南アジア方面からの名古屋近辺に観光客1.5倍に増加した」との評価もありと聞く。

今回ボストン美術館20年の終焉となるが、名古屋城本丸御殿の一般公開で、市民はもとより、外国人客へのPRで、文化遺産が愛知、名古屋の新しい魅力として期待される。

本丸御殿の復元工事が終わり、いよいよ今年6月8日から一般公開。テーマ「城郭建築と現代の匠の技」として日本を代表する建築物として関心を内外に発している。本丸御殿は、徳川家康第9子の尾張藩主徳川義直の居住のため1615年に建立。国宝に指定されたが、1945年大空襲で焼失され、復元工事が待たれていた。

「城」ブームとして、国内だけでなく、海外からの観光客が増えるかどうか注目される。

日本香港協会全国連合会

〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局　東京事務所内
電話（03）5210-5901　FAX（03）5210-5860

NPO法人日本香港協会（東京）　電話（03）5210-5870
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

関西日本香港協会　電話（06）4705-7030
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

中京日本香港協会　電話（050）3620-2517
〒460-0003　名古屋市中区錦2-11-27　TH錦ビル8階　株式会社喜斎内

九州日本香港協会　電話（092）451-8610
〒812-0011　福岡市博多区博多駅前2丁目9-28　会議所ビル1階
地域企業連合会　九州連携機構 内

山形日本香港協会　電話（023）665-1310
〒990-2301　山形市蔵王温泉丈二田752-2
ユニテ蔵王ジョーニダ・リゾート内

北海道日本香港協会　電話（011）261-4288
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-7　北洋銀行ソリューション部内

宮城日本香港協会　電話（022）226-7025
〒980-0014　仙台市青葉区本町1-2-5　第三志ら梅ビル2階西
（株）Sola.com 内

沖縄日本香港協会　電話（098）8686-3758
〒900-0033　那覇市久米2-2-10　那覇商工会議所内

広島日本香港協会　電話（082）248-1400
〒730-0052　広島市中区千田町3-7-47　広島県情報プラザ3階
（公財）ひろしま産業振興機構　国際ビジネス支援センター内

新潟日本香港協会　電話（025）365-0001
〒951-8052　新潟市中央区下大川前通四ノ町2186番地　愛宕商事株式会社内

高知日本香港協会　電話（088）855-9570
〒780-0842　高知市追手筋2-6-9　大手門ビル3階西
株式会社オルトル内

URL　http://www.jhks.gr.jp

KYUSHU

九州日本香港協会

福岡県香港事務所　所長　山奇　智幸

香港でのラグビーワールドカップ2019 九州開催プロモーション

来年9月から11月にかけて、アジア初となるラグビーワールドカップ(RWC）日本大会が開催される。九州では、福岡、熊本、大分の3県が会場となっており、全48試合のうち10試合が九州で開催される。RWC日本大会の開催期間中、世界中のラグビーファンが試合観戦のため日本各地を訪問することが期待される。特に、アジア地域からの観光客が中心の九州にとっては、ラグビーファンが多い欧米・オセアニアからの観光客に対して、九州の魅力を知ってもらう絶好の機会となる。そこで福岡県は、本年4月に熊本県と大分県の3県合同で、香港で毎年開催され、10万人を超える観戦客が集まるアジア最大のラグビーイベント「香港セブンズ」において、RWC2019九州開催プロモーションを実施した。このプロモーションでは、香港、そして世界各地から集まったラグビーファンに対して、RWC2019の九州開催を周知するとともに、食、自然、温泉といった九州の魅力をPRした。以下、今回の合同プロモーションにおける、主な取組みについて紹介したい。

◆香港でのRWC2019九州開催プロモーション

4月6日～8日に開催された香港セブンズをメインとして、その週の始めからラグビーウィークとして関連試合やイベントが開催された。

⑴**九龍ラグビーフェスト（4月5日）**　九龍ラグビー協会主催のアマチュア大会で、香港セブンズに合わせてイギリス、オーストラリア、アメリカ、フィンランドなど、男女合わせて38チームが参加。試合会場ではRWC2019九州開催PRブースを設置。熱戦の後も、約500人が参加するレセプションが開催され、RWC2019九州開催の周知やPR動画の上映を行い、世界各地からのラガーマンに九州の魅力をPRした。参加者から、試合観戦のため日本を訪問予定との声が多く聞かれ、九州をPRする絶好の機会となった。

⑵**香港セブンズ（4月6日～8日）**　香港セブンズの試合会場にRWC2019九州開催のPRブースを設置。福岡県から「ふくおか官兵衛くん」、熊本県から「くまモン像」などのゆるキャラも登場し、多くのラグビーファンやその家族連れが記念撮影を行っていた。また、福岡県からの訪問団は、香港ラグビー協会のピーター・ダンカン会長ほか協会幹部を表敬訪問し、RWC2019九州開催のPRを行った。会場周辺のファンゾーンでは子供から大人まで楽しめる様々なアトラクションが設置され、連日多くの人で賑わっていた。ラグビーファンの多くはビール片手に試合観戦を楽しみ、試合終了後には、香港有数の歓楽街である蘭桂坊（ランカイフォン）へ繰り出し、再びビールを片手にラグビー談議に花を咲かせている姿が多く見られた。蘭桂坊では香港セブンズ公式行事として、飲食やアトラクションなどの様々な露店に加えて、音楽の演奏など、訪問客を飽きさせない様々な仕掛けが随所に見られた。

香港セブンズ会場

◆今後の課題と対応

今回のプロモーションでは、メインターゲットの欧米系ラグビーファンに対して、RWC2019九州開催を大いにアピールすることができた。今後の課題としては、食、自然、温泉といった九州の魅力発信に加えて、蘭桂坊で過ごす様な、ナイトタイムの楽しみ方を提案していくことが重要だと思われる。アジア系の観光客が中心の九州地域では、ナイトタイムにグルメやショッピングを楽しむ姿は多く見受けられるが、九州最大の繁華街である中洲ですら、蘭桂坊や六本木のようにビール片手に談笑する欧米系の観光客を見かけることはまだ少ない。

一方で、福岡市中心部の川端商店街の様に、国際会議の開催に合わせて、国内外からの来訪者へのおもてなしとして、地域一体となって、夜遅い時間帯までの飲食やショッピングの場の提供、音楽ライブなどのおもてなしイベントの実施、博多織・人形の販売・実演など、福岡ならではの夜の魅力創出に向けた取組みもはじまっている。当事務所では様々なイベントの機会を捉えて、香港在住の欧米人を中心に、RWC2019九州開催のPRに加えて、ナイトタイムの楽しみ方に関する情報を発信するなどして、ラグビー観戦者が試合後すぐに首都圏に戻ることなく、一日でも長く九州に滞在してもらえるよう取り組んでいきたい。

九州開催PRブース

レセプション

ピーター会長と小川知事

蘭桂坊の様子

米沢市ホストタウン推進室

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて

◆ホストタウン登録

米沢市は平成29年7月7日に内閣官房が推進する2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウンに登録されました。ホストタウンとは、地方自治体が大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を行い、地域の活性化や観光振興を図るというものです。

2002年日韓ワールドカップで当時、大分県中津江村という人口1,000人程度の小さな村が、カメルーン代表チームの事前キャンプ地となり、その時起きたカメルーン代表チームの5日遅れのキャンプ地入り、それを健気に待ち続ける中津江村住民のエピソードは、連日メディアで取り上げられていました。そのようなアクシデントでも住民はカメルーン代表チームを応援し続け、友好を育んだものです。その結果、今でも交流が継続しており、中津江村はサッカーなどの合宿の聖地として認識されているようです。ホストタウンの目的もこのようなイメージを持っていただくと分かり易いと思います。

現在、米沢市では香港と、フェンシング競技を通じたホストタウンを推進しています。平成4年に山形で開催された「べにばな国体」をきっかけに、現在でも盛んにフェンシング競技が行われています。

本市を中核とする山形県フェンシング協会は、アテネオリンピック、北京オリンピックに出場した池田めぐみ選手が所属しており、各年代の世界大会出場選手などが多数所属する東北有数の団体でもあります。さらに、平成30年2月16日から21日まで香港フェンシング協会ジュニアチームの合宿地に日本フェンシング協会から米沢市が推薦されました。米沢市には香港と関連のある会社もあります。そして、山形県と香港の交流を深める山形日本香港協会が再開されたことでホストタウン登録に繋がりました。

◆バウヒニア・フェンシングワールドカップ

平成30年2月17日に米沢市営体育館において、香港フェンシング協会ジュニアチームの合宿に合わせ、第1回バウヒニア・フェンシングワールドカップを開催しました。この大会は、3名から5名でチームを組み、3名の紅白戦で行われました。香港チーム5チーム、県内外から21チームの合計26チーム、総勢101名参加し、男子の部では香港Aチームが優勝するなど、大変盛り上がりました。また、翌18日には、日本フェンシング協会女子ナショナルチームも加わり合同練習会を開催し、香港と日本のフェンサーが剣を交えて交流する絶好の機会となりました。

バウヒニア・フェンシングワールドカップ試合会場風景

香港フェンシングジュニアチーム集合写真

◆ホストタウン推進事業

今後のホストタウンの推進では、春の米沢上杉まつりや冬の上杉雪灯篭まつりにおいて、選手及び香港の方々の上杉まつりへの参加や雪灯篭の製作など、スポーツ以外での地域住民との交流も進め、米沢市の文化に触れていただきたいと考えています。また、同時に地域間交流として、米沢市から香港への派遣事業など、双方の文化を共有できる事業にも着手して行きたいと思います。

最後に、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功は勿論のこと、米沢市住民と大会関係者や香港の方々との交流を通して、スポーツの振興と地域の活性化を図るべく、山形日本香港協会の皆様のご支援ご協力を今後ともよろしくお願いいたします。

ジュニアチームさよならパーティーでの餅つき大会

HOKKAIDO

北海道日本香港協会　事務局

札幌市とジェトロ北海道、「香港ビジネスセミナー」開催

札幌市と日本貿易振興機構（ジェトロ）北海道が主催の「香港ビジネスセミナー」が、6月20日（水）ニューオータニイン札幌にて開催されました。

はじめに、日本貿易振興機構香港事務所長の伊藤亮一様が、香港市場の特徴とそのビジネスチャンスについてご講演されました。

人口推移や飲食関連人件費、主要都市の不動産賃料比較について、また日本食の普及状況においては、資本別日本食レストランの数や日本産食品の取扱い店舗数などについて解説いただきました。とりわけ、近年の健康・安全志向の高まりを背景に、北海道の肥沃な大地で育てた農産物は、食材本来の味が濃厚で栄養価も高いとして注目され、北海道産食品への関心が高まっているとのことです。さらには、高品質で安全・安心といったイメージとともに、今後も輸出が拡大する傾向があります。多くの資料とビジネス情報を元に、北海道企業の香港進出の可能性を探るきっかけを与えてくださいました。

続いて、香港デベロッパー大手の新鴻基地産発展傘下の日本式百貨店である「一田百貨（YATA Department Store）」の黄思麗CEO、謝素嫻ゼネラルマネージャー、莊偉倫様、余穎賢様が、香港からみた北海道の魅力について講演されました。

元々は1990年に開業した「西田（香港のSEIYU）」の名で知られる、当時は珍しい日本の食材を多く取扱う日系デパートでした。2008年に、日本語の歓喜の言葉「やった！」という言葉にかけて、現在の名称になりました。親しみやすく、馴染みやすい響きで、多くの香港市民に愛されるデパート・スーパーマーケットとして成長しました。「現在の日本式生活デパート」をコンセプトに、日本の食材や衣料品、雑貨などを取り揃え、ローカルにも人気があります。客層は、生活の質の向上を目指して高い購買力を持っている25歳から45歳の若い香港人です。現在、香港内にはYATAがデパート3店舗とスーパー8店舗を運営しています。これらの食品売場では、日本から輸入された果物、野菜などが販売されており、日本食品消費拡大に繋がっています。

来年の2019年1月中旬から約20日間、荃灣廣場（Tsuen Wan Plaza）と元朗YOHO MALL（Yuen Long YOHO MALL）の2店舗において、「YATA × 北海道食品フェア」の開催が予定されています。北海道食品の物産展、オルゴール製作体験ワークショップ、北海道・札幌の初夏を彩る風物詩のYOSAKOIソーラン祭りの演舞披露など、多方面での北海道の魅力を紹介します。当フェアの開催に向けて、セミナーに参加した道内企業に向けても、魅力的な道産品の出品を積極的に呼びかけていました。日本香港協会の皆さまも、この期間に香港を訪れた際には、ぜひYATAデパートに立ち寄って、香港と北海道をつなぐ当フェアの盛り上がりを体験されてはいかがでしょうか。

香港ビジネスセミナー

北海道日本香港協会 理事会を開催

北海道日本香港協会は5月17日（木）、理事会を開催し、同会をもって会長の横内龍三（㈱北洋銀行顧問）が退任、新たに石井純二（㈱北洋銀行会長）が就任しました。石井新会長は、北海道経済同友会の代表幹事を務めており、本年6月より道産品輸出や販路拡大を行う(一社)北海道貿易物産振興会の会長にも就任しています。

㈱北洋銀行で頭取などを歴任した経験と人脈を生かし、北海道と香港の文化・経済交流のさらなる発展に向けて努力してまいります。

役員
会長　　石井純二（㈱北洋銀行会長）
副会長　安斎　勲（大和交通㈱副社長）
副会長　町田隆敏（札幌市副市長）
副会長　永島雄二（日本清酒㈱会長兼社長）
副会長　新川新一（全日本空輸㈱執行役員北海道支社長）

宮城日本香港協会　事務局

平成30年度通常総会＆記念セミナー、懇親会を開催

5月24日（木）18時からパレスへいあん5階「エトワールホール」において、平成30年度通常総会＆記念セミナーを開催致しました。来賓に宮城県知事代理として宮城県経済商工観光部次長高橋裕喜氏にご出席頂き、48名（委任状出席を含む）出席のもと行われました。小野寺会長挨拶、高橋次長による宮城県知事の祝辞代読の後、議事に入り、大坪代表理事の議事進行により、第1号議案から第3号議案まで満場一致で可決・承認されました。

続く記念セミナーにおいては、香港貿易発展局東京事務所長伊東正裕氏による「香港市場の魅力とゲートウェイ機能（農林水産物・食品・伝統工芸品の輸出国として）」と題した講演がありました。氏曰く「香港人は日本に対する好感度が高く、食に対するこだわりが強い。刺身、うどんのコシ、パンのもちもち感、スープのだしがわかる人々だ」、そして「香港小売市場は高級化、日本化が進んでいる」と。今や香港では、和風弁当が、おむすびが、日本式カレーが、日本食としての焼き餃子が、そしてラーメンが大人気だそうです。

終了後、6階の「ソレイユホール」に移動しての懇親会、大坪代表理事の挨拶のあと、奥山仙台市長に代わって出席された仙台市経済局国際経済室長佐藤克行氏、香港貿易発展局東京事務所長伊東正裕氏が登壇、香港の素晴らしさ、香港との交流の重要性などを織り交ぜながら挨拶されました。そして、みやぎおかみ会会長阿部憲子様の乾杯で幕を開け、懇談となりました。今年のアトラクションは山形県白鷹町出身のシャンソン歌手大木実氏、毛皮店を経営する傍らシャンソンを勉強、4年前の第1回東京シャンソンコンクールでグランプリを受賞するなどの実力の持ち主、会場の参加者もついうっとり聞き入ってしまいました。

セミナー風景

講演会風景

「女性部会講演会：魅知国定席 花座ができるまで」を開催

暑さも真っ盛りとなった仙台、7月5日（木）、宮城日本香港協会事務局 会議室スペースに於いて、女性部会主催による「魅知国定席（みちのくじょうせき）花座ができるまで」を開催しました。

当日の講師は今年4月にオープンになったばかりの「魅知国定席 花座」席亭の白津守康氏、東北初の常設寄席「魅知国定席 花座」ができるまでの経緯や、寄席をより一層楽しめる豆知識、そして寄席を通じたまちづくりにかける想いなど、多岐にわたるお話を伺うことができました。

あっという間の1時間の講演、参加者の皆さんを囲んでの笑いの絶えない温かい時間となりました。その後、お昼を挟んでの寄席も大変好評で、「ぜひまた寄席に遊びに来たい」という参加者の声も多数聞かれました。

寄席会場「魅知国定席・花座」の外観

OKINAWA

沖縄日本香港協会

沖縄県香港事務所

香港で泡盛イベント（琉球泡盛の夕べ）開催

平成30年4月26日、香港で日本酒や焼酎、泡盛を取り扱い、日本酒類業界や食文化の発信を行う施設「Sake Central」にて、泡盛イベントが開催されました。今回は日本国総領事館との共催イベントとして、主にメディア関係者やブロガー、バーテンダー等の飲食店関係者等を約70名招待し、泡盛セミナー、泡盛テイスティング、泡盛カクテルが提供されました。

テイスティングでは古酒やリキュールタイプを含む16種類の泡盛が用意され、参加者は度数やメーカーによる味や香りの違いを楽しみました。特に泡盛カクテルは普段あまりお酒を飲まれない方にも飲み易いと好評でした。

今年より泡盛の海外展開強化の為、琉球泡盛海外輸出プロジェクトが設立され、今回のイベントについてもセミナーは国税庁から酒類国際技術情報分析官の方が担当され、泡盛の特徴や行程等をご説明いただきました。泡盛カクテルについては現地有力バーテンダーの他、泡盛マイスターの方にもご参加いただき、泡盛カクテルコンテストでグランプリを受賞した「サザンアイランドオキナワ」を振る舞うなどでイベントを盛り上げていただきました。また宮腰総理大臣補佐官や在香港日本国総領事館の松田大使にも本イベントへ足を運んで頂き、乾杯のご挨拶等を頂戴致しました。イベントの様子はNHKのニュースでも放送される等、多くのメディアに取り上げられたことから泡盛の認知度向上に繋がるものと期待しております。

泡盛の海外輸出先として香港は全体の3割以上を占めております。まだまだ認知度は低い現状もありますが、このようなセミナーや各イベント等を通して泡盛の楽しみ方を徐々に広げていけたらと思います。

泡盛カクテルを披露

泡盛のテイスティング

AEON屯門店で沖縄フェア開催

沖縄フェアのオープニングセレモニー

平成30年3月16日、香港内に12店舗あるAEONにて九州沖縄フェアが展開され、全店でも最も集客力の高い店舗の一つである屯門店では沖縄に特化したフェアが開催されました。同店舗は香港北西部に位置し、よりローカル感が強い地域で、また中国大陸が近いことから、大陸からの来客が多いことも特徴の店舗です。

フェアは店舗が入居するショッピングモールの大型催事場で開催されたことから多くの来場者に足を運んでいただき、多くのの県産品に触れていただきました。特に青果類は、次回の入荷までに売り切れが出る商品もあるほど人気が高く、また食品だけでなく、シーサーの置物や紅型のハンカチ等非食品に関しても、興味深く手に取るお客様が多くいらっしゃいました。

初日の16日（金）にはオープニングセレモニーが行われ、芸能団によるエイサー、三線等のパフォーマンスや、県産マグロの解体ショーで会場は大きく盛り上がりました。また各週末には星砂ボトルやフォトフレーム作成のワークショップも行い、家族連れを中心に沖縄を感じて頂き大変好評でした。

普段日本食フェアや展示会等の開催が少ない地域であったからか、非常にたくさんの来場者に興味深くフェアを楽しんでいただいた印象がありました。セレモニーでは、用意した席は満席となる等フェア及び沖縄への関心の高さを強く感じることが出来ました。

沖縄の野菜や食品の即売会

HIROSHIMA

広島日本香港協会　事務局　木村　将隆

香港からの観光客の動向について

日本政府は、2020年のオリンピック開催に合わせて、海外からの観光客年間4,000万人を目指そうとしています。2017年度の訪日外客数は2,869万人（出典：日本政府観光局　JNTO）対前年比465万人増と毎年、訪日観光客数は伸び続けています。

ところで、香港から広島への観光客の推移はどのようになっているのでしょうか。

平成29年のデータを見ると香港からの来訪者は147,005人となっておりますが、これは平成25年の10倍以上の来広数で、広島県の外国人観光客数全体の伸び率を大きく上回っています。

○広島県の外国人観光客数動向（出典：広島県観光客数の動向）

	H25	H26	H27	H28	H29	伸率※
（全体：人）	843,485	1,046,500	1,660,713	2,014,826	2,433,088	
対前年比	＋24.6	＋24.1	＋58.7	＋21.3	＋20.8	＋188.5
（香港：人）	14,491	17,636	59,851	173,187	147,005	
対前年比	＋173.6	＋21.7	＋239.4	＋189.4	▲15.1	＋914.5

※H29年のH25年に対する伸率

この香港からの観光客数の増加を支えているのが、香港を誘客重点エリアに設定してきた県や関係機関等の取組。そして就航を再開した香港と広島の直行便です。

◆香港直行便について

平成27年度、広島県にとって大きな出来事がありました。国際線では中四国地方で初となるLCC（格安航空会社）香港エクスプレスの就航です。

広島には過去、香港との直行便がありましたが、平成15年のアジア各国でのSARS（重症急性呼吸器症候群）の流行による利用客の激減で運休となり、その後のリーマンショックによる世界的な不況なども影響し、本格的な定期便の就航がない状況が続きました。その後、景気の回復に伴い、年末年始やGWにチャーター便が運航されるようになり、概ね好調な搭乗率を記録する中、平成27年10月に中四国地方初のLCCとして香港エクスプレス航空の定期便が就航しました。

◆なぜ広島を就航先としたのか

今回、広島県空港振興課を通じ、香港エクスプレス社になぜ広島を就航先として選択したかお聞きしたところ、「就航当時、香港では日本が観光旅行先として大変人気があり、日本旅行リピーターが増えていた中で、既に東京や大阪を訪れたコアな日本ファンにとって、次の旅行先を決める際、広島は平和関係の本で名前は知っているが実際は知らない興味深い土地として人気があった。」また、就航当時、中国地方には海外LCCは就航しておらず、広島が中四国地方で最も人口規模・経済規模が大きかったため、「アウトバウンドのポテンシャルも期待できることから広島を選んだ。」とのことでした。

◆就航が広島にもたらしたものとこれから

この渡航費を安価に抑えることのできるLCC路線の開設により個人の観光客が増加しました。香港からの観光客は旅に癒しを求める方が多いとのこと。広島では定番となっている世界遺産の宮島、平和公園に加え、ウサギの島として有名な大久野島や一面に花が咲き誇る世羅高原、また牡蠣やフルーツ等のグルメなど個別ニーズを踏まえ、より多くの方に来広していただくよう情報発信などの取組が積極的に行われています。

◆西日本豪雨災害の観光地への影響について

平成30年7月、西日本では記録的な大雨により各地で土砂崩れや河川の氾濫が相次ぎ、人的被害や、幹線道路、鉄道の寸断など広範囲で被害が発生しました。現在も数か月、数年にわたる復旧活動が各所で懸命に続けられています。観光に関しても、宿泊のキャンセルなどの影響が出ており、その額45億円との発表（H30.7.24）がありました。これは直接の被害がなかった宮島や県東部の鞆の浦などの観光地も数多く含まれているとのことです。

復興のためにも、多くの観光客にお越しいただきたいと、観光関係団体のWEBサイトなどでは、観光地の被害状況やアクセスに関する情報などの情報発信を積極的に行い、風評被害の広がりを抑制するとともに、広島への観光を呼びかけています。

◆最後に

当広島日本香港協会も、広島の企業や団体に香港の事をより多く知って頂く機会として、インバウンドビジネスセミナーの開催や春節の意見交換会などを開催しておりますが、今後も香港との新たな交流の拡大を図り、香港からの観光客の更なる誘致や、県内企業のインバウンドビジネスの活性化等につながるよう、事業を展開していきたいと思います。

被災地を始め、今回の豪雨災害の被害を受けた方々に一日も早い日常が戻ることを心からお祈り申し上げます。

NIIGATA

新潟日本香港協会　事務局長　田中　湖雄

大地の芸術祭にて香港ハウスが開館

越後の妻有、すなわち現在の新潟県十日町市、津南町を中心に今年も「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」が7月29日よりスタートしました。この大地の芸術祭は3年に一度の開催で今年は7回目にあたり9月17日までの約2ヶ月間、越後妻有の里山を会場にアートを楽しむことが出来ます。そして今年はこれまでの芸術祭で開館したオーストラリアハウス、中国ハウスに続いて、ついに香港で注目を集める建築家のイップ・チュンハァン氏らによる香港ハウス「香港部屋」が誕生しました。それではここでその香港ハウス建築設計チームによる香港ハウスの設計コンセプトの一文を紹介します。

新潟県津南町の外れに建つ香港ハウスは、住宅に囲まれた静かな界隈にある坪庭の北側一角を占めています。越後妻有アートトリエンナーレの主要会場の一つである上郷グローブ座を近くに見下ろせるこのハウスは、津南町上郷地区の郷において香港のアーティストたちの作品を紹介する主な舞台ともなります。香港ハウスは、緑豊かな絵画のような風景に着想を得て、切妻屋根とアーティストの居住空間の床を支える主要構造部材が木の枝のような形状をとっています。シンプルで幾何学的な傾斜屋根は、近隣のこの土地独特の建造物とも呼応し、多面体のようなエントランスファサードが活気ある趣を添えています。エントランスファサードとアーティストの居住空間には、地元産の木材「魚沼杉」を使用し、直線形の銀色の建物の外壁には、やはり地元の村落の建築に広く使われている亜鉛めっきの金属被膜材を採用しています。印象的な外観の二階建ての建物の中に、展示空間とアーティストの居住、コミュニティキッチンが設けられます。木陰になるエリアに香港製の亜鉛めっきローラーシャッター、郵便受け、ネオン風看板が設置され、越後妻有の自然と一体になって穏やかな歌を奏でます。来館者の皆様は展示をご覧になるほか、香港のアーティストたちと話をしたり、地元住民の皆さんと一緒にコシヒカリや雪下人参ジュースを味わったり、あるいは、周辺の農村風景を眺めるだけでも楽しんでいただけるでしょう。人とアートと自然が共存すれば、寂しさは生まれない。――香港ハウス建築設計チーム

7月29日の落成披露パーティーには関係者のほかに香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部の首席代表シェーリー・ヨン氏も参加。また新潟日本香港協会からは吉田会長をはじめ8名が参加しました。香港ハウスでは大地の芸術祭開催中に香港在住のレジデンスアーティストのリャン・チーウォー氏とサラ・ウォン氏による「津南ミュージアム・オブ・ザ・ロスト」が公開され、会期終了後も毎年多様なアーティストを選定して、継続的な活動を行う予定だそうです。読者の方々がこの原稿を読まれている頃には大地の芸術祭は閉会を迎えているかと思いますが、この香港ハウスをはじめ通年で鑑賞できる作品も多くあります。ぜひ一度新潟県の妻有へ里山アートを楽しみに足を運んでください。

落成披露パーティーの様子

KOCHI

高知日本香港協会　事務局長　横山　公大

高知から香港へ～新体制によるこれからの高知日本香港協会の役割～

高知日本香港協会が発足して3年。先日の理事会並びに総会において、全会一致にて森本麻紀（株式会社グラディア代表取締役）が新会長に就任し、新体制としてスタートしました事をご報告申し上げます。併せまして、私、横山公大が事務局長として会長をはじめ会員の皆様のサポート、また会の円滑な運営に携わらせて頂きます。不慣れではございますが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますが森本新会長の紹介をさせて頂きます。

1975年生まれ（高知県出身）、現在株式会社グラディア代表取締役、有限会社ゴーイング専務取締役を務めながら、観光DMO「ものべみらい」（株式会社地域経済活性化支援機構）のシニアアドバイザー、株式会社ヤ・シィの経営マーケティング部長として高知県の観光、また地域発展に務めております。自社が運営する飲食店、5019プレミアムファクトリーは、地元客のみならず、インバウンドや多くの芸能人も訪れ、テレビ取材も頻繁に依頼があるほどの大人気店。名物は、高知の食材をふんだんに使用した龍馬の如く大きな「龍馬バーガー」。そしてこのハンバーガーに一目ぼれをした香港在住の商社マンが、是非香港にも出店をと持ち掛けられ、現在香港島のセントラルに第2号店として出店しております。

香港出店までの苦難の道のりは、今後香港へのチャレンジを考える人たちへの良きアドバイスにもなろうかと存じます。高知、また香港へお越しの際には是非お立ち寄りください。

森本新会長

さて、現在高知の会員数は、法人16、個人15の総数31会員でございます。過日、2018年7月19日に、今年度1回目の理事会が開催され、会長の挨拶において今年度の方向性と事業案が報告されました。大きくは以下でございます。

1. 会員拡大
2. 定期的な理事会の開催
3. 交流会の開催
4. 研修会の開催
5. 香港研修旅行

高知も御多分に漏れず、インバウンドは増加中です。アクセスに多少の難点はあるものの、すでに香港で流行しているビジネス事例もあり、今後、意欲のある方達へ積極的にアプローチをし、ビジネスチャンスに繋がるよう、本協会としてサポートができればと考えております。事務局長としても全国の事例を積極的に情報収集し、高知への橋渡しになるよう努めて参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

高知日本香港協会集合写真

鉄板焼グリル

2018年10月1日
オープン

鉄板焼グリル

TEPPANYAKI GRILL

ご予約・お問い合わせ

T 03 3348 1234（代表）
hyattregencytokyo.com/restaurant/

＊掲載 CG は計画段階のものであり、変更となる場合があります。

ハイアット リージェンシー 東京
160-0023 東京都新宿区西新宿2-7-2
T 03 3348 1234

HYATT
REGENCY™

The HYATT trademark and related marks are trademarks of Hyatt Corporation or its affiliates.
©2018 Hyatt Corporation. All rights reserved.